



Title	「文化」の解読（23）：文化とコミュニケーション はしがき
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91524
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

はしがき

「〈文化〉の解説」をメインテーマとする共同研究プロジェクトは、言語文化共同プロジェクトが誕生した2000年に発足した。23年目となる2022年度は、「文化とコミュニケーション」というテーマを掲げて、本プロジェクトを遂行した。

収録した7本の論文の内容は、以下のとおりである。アウマン論文は、道家がなぜ道というものを原理的に言語では規定できないものと考えているのか、という問題に取り組み、ヨーロッパ哲学の伝統から諸概念を引用して比較検討している。李論文は、1960年に公開された満洲の歴史を題材とする映画『流転の王妃』を考察対象として、フェミニズム批評の観点から、当時の日本大衆文化における帝国日本の植民地支配に関する文化的記憶の表象、およびその背後の文化的力学について論じている。徐論文は、若尾文子と京マチ子のスター・ペルソナやスター共演といった点に目を配りながら、増村保造によってリメイクされた『千羽鶴』(1969)における恋敵、母娘という女同士の関係について考察している。山本論文は、東ドイツの住宅政策の主役であったプラッテンbauと呼ばれる工法による団地建築を表象した映画に注目し、町と住居の分裂、建築家のジレンマといった観点を指摘している。胡論文は、香港の映画監督ウォン・カーウァイによる映画作品『欲望の翼』(1990)における時間のイメージとフラッシュバックの役割への考察を通じて、語り得ないトラウマに映像でアプローチする可能性について探求している。津田論文は、村上春樹の短編小説『ドライブ・マイ・カー』の濱口竜介監督による映画化において行われたいくつかの大きな変更によって、他者理解と喪失からの回復という原作小説の二つの重要なテーマがさらに深化されていることを論じている。西出論文は、ドイツ語によるプレゼンテーション動画の作成を取り入れた授業実践を紹介し、学習成果発信型のメディア授業を実現するための提言を行っている。

今回が人文学研究科言語文化学専攻となってからの最初の号となる。紙媒体での刊行が原則としてなくなるなど、外的な変化も多いが、文化についての論考を自由に発信できるメディアとして、これからも「〈文化〉の解説」という場を大切にしていきたい。

2023年5月

執筆者一同